

『現代の子ども理解—いじめ・自殺問題から考える』 ～子どもの実感を生かした教育実践のために～

福井雅英氏（北海道教育大学教職大学院）



今回の全学教育研究集会では、福井雅英北海道教育大学大学院教授が下記レジュメの内容で記念講演を行いました。

福井教授は、昨年9月札幌で中学生が自殺した事件の「生徒の自殺に関する調査検討委員会」委員長を務め、生徒の現実を探るなかで感じた、現代という時代に思春期を過ごしている若者たちの苦悩をどう読み取るかという問題を、今回の公開研究授業で感じた思いつきから話を進められました。

その講演冒頭で話された、公開研究授業に関わる部分をご紹介します。

▶現代の子どもの内面をどうとらえるか

昨年7、8月大津で、さらに9月には札幌で自殺した中学生の事件が、非常に大きな社会的問題になりました。

文部科学省のいじめの定義は、一定の人間関係のある者の間で起きるとなっています。つまり、子ども同士の関係の間で起こるものということになっているので、「誰がいじめたんだ」となりがちです。昨年事件からこの間の社会的関心の流れは、そうだったのではないかと思います。

しかし、札幌で自殺した生徒の周辺を徹底的に調べましたが、いわゆる「いじめ」という事実ではできませんでした。そこで、いじめというものをもっと広くとらえるべきではないかと私たちは考えました。誰がいじめたかではなく、何が「いじめ」だったのか。今の子どもの問題を考えると、きわめて象徴的に突き付けられている問題は何か、何が子どもを苦しめているかを考えなければいけないと考えました。

生まれた時から競争があって、良い子でなければ、できなきゃだめなんだという圧力は、多くの子にとって否定感の強い圧力になります。それは国際的な調査でも、日本の子どもの自己否定の強さは、データとしてある。

そういうなかで思春期を生きるということは、何か自分に誇りがいる。そういう誇りを頼りに思春期を生き抜いて、自立の道をたどる。しかし、その誇りを持ちにくいのが、高度成長期と違って、「頑張ったって良くなれない」という今の時代です。

そこで、子どもといちばん長く接している教師が、その子どもの様々な苦

悩を察知するアンテナを磨かなければならない。じゃあ、どうやって子どもの苦悩を読み取るか。文科省のいじめの定義は、一定の人間関係のあるものから物理的、心理的な攻撃を受けて苦悩を抱えたらそれはいじめだという。それは、被害者の側からいじめを定義したという点では意味があります。しかし、個人の内面の苦悩をまわりから大人が見てどう判断するのか。これは相当に難しいことなのです。

子どもへの理解というのは、教育実践のスタートであり、帰結だといえます。子どもの内面のリアリティを捉えるため、教師は子どもの表情やまなざしや身振りや様々な言動から子どもを理解しようとします。そこでは、ある一定の生活をともにする時間、あるいはその密度というものが、非常に大きな意味を持つてくるだろうと思います。

▶教師と生徒が「柔らかな雰囲気」

私は、この旭丘高校に来て、先生たちと生徒のやり取りの雰囲気を、授業以外にもいろいろ見せていただきました。非常に柔らかい雰囲気です。生活を共にしているという雰囲気が、学校全体の中にあると思いました。

多くの公立の現場を歩いてみると、そこは非常に難しいところです。本当の姿を先生に見せないように対応している高校生たちはたくさんいます。そこをどう解放するかが問われている。触れあう時間の総和と、慈しみの感覚が非常に大事になってくると思います。

この1日半の公開研究授業を見せていただき、教室での生徒と先生の関係が素晴らしいと思いました。

たとえば、今日の午前中の数量の時間の先生の対応などを見ると、楽しくなります。非常にきめ細やかな配慮もされていると思いました。一つひとつの対応が柔らかい。そして、相の手を入れたり、ちょっと助言をしたりという雰囲気が、子どもに届いている感じがする。子どもは問い詰められているんじゃない、励まされている。助けられている。引き出されているという風になっているんじゃないかと感じました。

しかも、学習の経過を見ていると、いろんな失敗をそのまま出せる。間違いの受け止め方がまた柔らかくて、意味がある。「自信を持って」「大丈夫だ」

といわれ、そこで考える意味がある。内面の葛藤や、自分の中に起こってくる模索の過程を、全部出しても大丈夫だという雰囲気、授業の中で、みんなできつっている。そこが素晴らしいと思います。

生徒自身も、班で学習することで気楽に話し合えてよかったと言っている。これは、あたりまえのことにみえて、今の非常に厳しい多くの学校の現実では、子どもから出てくるような言葉じゃないんです。子ども同士でさえ下手なことは言えない、失敗はできないと思っている、気遣っている関係がある。だから、こういう言葉が子どもからずっと出てくるのは、相当なことだと思います。

そういう、教師が作り出す雰囲気は、子どもに対する理解に立っているのだと思います。この学校の先生たちの雰囲気をずっとみせていただくと、口はばつたい言い方ですが、子どもに対する親愛の情にあふれている。それはすごく大事なことです。一人ひとりの子どもが生きて存在して、一人ひとりの子どもが内面の真実を抱えた存在なんだというような認識がなかったら、出てこないような親愛の情じゃないかと私は感じました。

厳しい要求も当然されるが、それは相手への応答がちゃんとできる、生徒への信頼があるんだということが伝わってくると思ったわけです。子どもを理解するときに、その子その子の文脈に沿って理解しようという努力がされていると。

▶教師と生徒の関係性が生きる授業

象徴的な場面でいえば、昨日見せていただいた選択講座国語基礎の授業。先生は、「聴写」というような授業の方法をとられました。それは、目の前にしている子どもの実態に対する理解、把握があって、そういう方法を取られたのだと思います。教材の選定もすごかった、教材の持つ強さも子どもを引き込んでいることももちろんあると思いました。

でも私は、先生が読んでいるあの読み方、それによって、先生と生徒の関係が浮かび上がるという感じがしたので。生徒たちが先生を大好きな様子が伝わってくるんです。先生も、それを楽しんでおられるような読み方でした。

ここは繰り返す、ここはちょっとゆっくり読んでやろう、もう少し長めに挑戦してみるかというような、様々な思いが教師の内面に去来して、センテンスの区切り一つにしてもそういう気持ちが出てくるんだと思いました。

つまり、授業にしても、生徒と教師の関係性というものをどう作っておくかということが、授業の内容の具体的な分析もさることながら、同時に必要ではないかということを感じさせられました。

「聴写」ということで、聞きとって書いていくという、生徒にとって非常に素朴な達成感、はっきりした形で「俺は今これだけやったんだ」ということが見える、そういうものも大きかったんだらうと思います。また、辞書を使うという必然性、とにかくひきたくな

るという必然性も生み出されていたと思いました。

それと、一つすごいと思ったのは、班ごとにテーマをつけて発表するとき、外見的には非常に気になる生徒がいて、内面にいろいろ葛藤を抱えているのかなと注目して見ていたのですが、その子が、「健康なご老人の誕生日」と題をつけたのです。「健康な年寄りの」とはつけなかった。僕はこれに感心しました。

見た目からして、「ご老人」という言葉を使うとは、すぐには理解できないような子です。でも、彼が「ご老人」の一言に込めた思いは、すごいことなんじゃないでしょうか。学習の中で、老人に対する敬意、年寄りをどう見るのかが、自然と彼の中に入っていてその一言をつけさせたんだと思います。

これはすごいことだと思いました。

そう考えると、ここで授業研究や授業分析をするなら、誰がどういう題をつけたのかという意味を、その子の文脈に沿って考えて上げるということが、次の課題としてあるのではないかと。そのことを、「ご老人」という言葉を選んだその子から、私は教えられた感じがしたわけです。

つまり、子どもはいろんな表現をしますが、その表現に込められたその子の本当のメッセージ、その子にしかできない表現の持っている意味、その子の文脈を読み取るというような、授業を通しての子ども理解というものを、授業分析の一つの柱にしてもらいたいというのが、今の私の願いです。

講演レジュメ

はじめに

- 札幌市「生徒の自殺に関する調査検討委員会」委員長を引き受けて感じたこと
- 問題の背後に多くの複雑な要因
- 1. 子どもは時代の子・社会の子
 - 子ども理解を深める社会認識の問題
 - 「よい子・できる子・がんばる子」競争の熾烈化
 - 思春期の生きづらさを考える…第二の誕生と誇りの問題
 - 攻撃的環境と自己責任論の広がり
 - 生活と家族をどうみるか
- 2. 教師は子どものサインをどう受けとめるのか
 - 表情・まなざし・雰囲気…ふれあう時間の総和と慈しみの感覚
 - 読みとる・読み解く…その子の文脈にそって読み深める
 - 本当のメッセージは何か…言動に込められた内面の真実
- 3. 問題を共有する—教師の協働を考える
 - 情報の共有から問題の共有へ
 - 視点の違いこそ大切に…経験・年齢・教科・教室・保健室・職員室

- 子ども理解のカンファレンスのすすめ…固有名の子どもを具体的事実で語る
- 子どもが子どもを理解し繋がり合う関係へ
- 4. 学校は何をやるどころか、どう育てるか
 - いのちを慈しみ、輝かせる
 - 人間らしい成長を考える—自殺・いじめ予防の対策を越えて
 - 新しい世界を拓き、社会性を育てる…学ぶよるこび、自分の発見、友とつながる
 - 生活の場として「学級」を位置付け直す…本当の自分を出せずして本当の学びはない
 - 福祉的援助の教育的意味…保育・学童保育実践に学ぶ
- 5. 教師の生き甲斐を取り戻し、学び続ける
 - 生き生きと子どもと関わること…教師の原点
 - 「歯の抜けた子どもの笑顔に会える」(フィンランド・カヤニの教師の言葉)
 - 「教師は現場で育つ」…振り返りと学び合いこそが教職生涯にわたる自己形成の基本
 - 実践を検証する主体になる…子どもとともに実践を振り返る
- 6. おわりに

今回は、旭丘高校の教育研究集会「今昔物語」(その1)なので、旭丘教草創期のあれこれをお話しよう。

わが新名学園旭丘高校は、昨年創立110周年の節目を迎え、次なる120周年に向けて「新総合計画」を策定、これにより経営と教学を一体化した新たな学校づくりを開始しました。

旭丘全学教育研究会も17回目を迎え、通算では第51次を数えました。職場教研のそもそをもを想うと隔世の感があります。

今は昔、旭丘の教研は1961(昭和36)年7月15日の組合結成と同時に実質スタートしたと言ってもいいと思います。当時は箱根大平台の研修室で職員が夏休み全員参加で合宿し、温泉に浸り、時には酒を酌み交わしながら、みんなで食事をつくり、みんなで舌鼓を打ち、みんなで夜を徹して語り合いました。分科会では職員と事務・用務に分かれ、就業規則そして労働協約の改善や、仕事のことでの不満や要求を出し合っ

て討論しました。

その頃の1960年代は、この国が高度成長期に入り、「豊かな社会」に向かう半面、日米新安保条約と平和をめぐる問題や公害問題などで騒がしい世の中でした。教育界では、上からの統制・画一化が進み、全国中学学力テストが強行されました。時あたかも、1961年、本校では「学園紛争」が起こり、校長・理事長の交替がありました。職場で働く仲間たちは、生活と権利を守り、教育を良くするため同年職員組合を結成し、学園は民主的な学校づくりへと向かっていきました。

大平台教研では、社会科の阿部先生が公害問題について発表したり、理科の野島先生がベトナム戦争のことで問題提起したのをおぼえています。また、日常の学習会では、職員室で週1回ぐらゐの割合で、小川太郎の書いた『立身出世主義の教育』を題材にし、「ざる蛇樽泥鰌」ではないが、人を蹴落としても出世しようとする、教育のあり方を批判的に討議しました。こういうところにも今の旭丘の民主的な教師集団づくりの基点があるのではないかと思います。



旭丘教研今昔物語 (その1)

旭丘教研・そもそもの1960年代のこと

小島稔理事(談)